

戦後学生セツルメントの子供会活動**—「子どもの貧困」へのアプローチを考える一助として—**

日本福祉大学大学院 岡本 周佳(009283)

[キーワード] 戦後学生セツルメント、子供会活動、子どもの貧困

1. 研究目的

近年、「子どもの貧困」がクローズアップされている。2016年の「国民生活基礎調査」では、2015年時点での「子どもの貧困率」は13.9%となり、7人に1人が貧困状況にあるといわれている。そうした中、各地で子ども食堂が広がりを見せている。この取り組みは、地域において子どもたちの居場所として機能するもので、地域住民やボランティアが中心となって取り組まれている重要な活動であることは言うまでもない。しかし、急激に「子ども食堂」が増えたことにより、その質や中身が問われていることもまた事実である。

一方で、現在の子ども食堂の試みは、戦後の学生セツルメント運動の実践と重なる部分が多い。そもそも、セツルメントは、イギリスでの発足当初から貧困地域をその対象としていた。戦後の学生セツルメントにおいても、長年にわたって学生が主体となり、さまざまな地域に出向き、その地域に応じた活動を行ってきた。全国に広がりを見せ、活動を行ってきたが、とくに子供会活動を行うセツルメントが多くみられた。これらのセツルメントは、その地域で生活する子どもたちの実態に応じた実践を模索し、地域住民と共に新たな活動を創り出してきた。ここには、実践の主体が学生であると同時に地域住民や子どもたちも主体としてエンパワメントされていく過程が見出される。その意味で、戦後の学生セツルメントの実践から得られる示唆は大きいと考えられる。

本研究の目的は、こうした背景をふまえ、学生セツルメントが行ってきた地域での子供会活動に着目し、その展開と実践内容を明らかにすることを通して現在の子どもの貧困問題へのアプローチを考える一助とすることである。

2. 研究の視点および方法

研究方法は、歴史研究とし、時期区分ごとの学生セツルメントの子供会活動に着目して、一次資料から分析を実施する。分析にあたっては、大阪府立大学所蔵の学生セツルメントに関する史資料を主に用い、オールド・セツラーへのインタビュー調査を用いて補足する。

時期区分は、①学生セツルメントの再興期 1945-1955年、②学生セツルメントの組織構築期 1956-1966年、③学生セツルメントの転回期 1967年-1973年、④学生セツルメントの組織変容期 1974-1989年、とする。

3. 倫理的配慮

本研究にあたっては、「日本社会福祉学会 研究倫理指針」（2004年10月施行）を遵守

した.とくに,倫理面では「引用」の項目を遵守した.

4. 研究結果

1954年に誕生した関西初となる愛染園学生セツルメントの児童部は,当時の活動地域である下寺・日東地区の実態調査から明らかとなった保育状態の不十分さが当該地域児童の情緒の未熟と情操面の発達へ影響しているとの考えから,この地域で「紙芝居,幻燈,人形芝居,歌等を通じて豊かな情操を養い,セツラーと子供達との愛情と善意に満ちた接触により,様々な情緒の充足,調整をはかり,共に遊ぶ中で社会性,協調性を身につけてゆくといった子供会の機能」(愛染園学生セツルメント 1952:12)は重要と位置付けている.こうした地域の社会調査に基づく実践は,1980年代まで継続して意識されてきた特徴の1つである.

また,1962年,東住吉セツルメントの中学生勉強会は,中学生のけんかやお金の紛失をきっかけに一度は活動を中止する.しかし,中止の半年後,「中学生からも学校へ行って勉強をしたいから子供会で勉強を教えて欲しいという子供会再開の声があがって来た」(東住吉セツルメント 1963:5).このため,中学生とセツラーと一緒に活動場所を探すことを通して,中学生自身にも「自分達の子供会という意識」が芽生え,「勉強を教えてほしいという子供達の要求が原動力となって子供会はうまく行きはじめた」(同上:7).ここには,セツラーが一方向的に与えるのではなく,子どもたちも主体となることで相互に学びあう関係性が見出される.同時に,「要求」を中心に置いた実践が意識されていた点も垣間見られる.

また,新今宮地域で実践を行った住吉セツルメント(1970)では,いつも赤ちゃんをおぶって遊びに参加できない少年やお金を持たされて夕食を済ませる姉妹について言及している.そのうえで,地域の現実を知ること,父母との結びつきとして家庭訪問や新聞を発行すること,子供の要求を実現できる遊びの開発や地域の歴史,性格を検討し,地域を理解する努力をすること等が必要だとしている.

5. 考察

戦後の学生セツルメントの子供会活動では,時代や地域に応じた活動を行うため,地域状況の把握や実態調査が行われてきた.また,「要求」をキーワードに据えた実践が行われ,子どもたちや地域住民自身の力を引き出し,共に実践を創り出す主体となっていた.さらに,地域に出向き,実践をすることを通して地域の現実を知り,セツラー自身の学びの場にもなっていた.戦後学生セツルメントの実践史から,何を行うかというプログラムのみならず,視点や考え方,思想を大切に,住民らと協働して取り組む必要性を指摘できる.

文献

愛染園学生セツルメント(1952)「昭和31年度日東地区に於ける諸活動(第四報)」/東住吉セツルメント(1963)「道標 第5号」/岡本周佳・山田正行編(2018)『学生セツルメントと大阪府立大学【大阪府立大学史資料叢書Ⅰ】』大阪府立大学研究推進機構大学史編纂研究所/住吉セツルメント(1970b)「住吉セツルメント 夏合宿各Part 実践報告集 於:小豆島」